

左翼というのは、義理人情での兄弟、親子だという価値観より、何よりも将来の理想社会や社会変革を推し進めていく思想、理論で見解を一致させている同志としての関係を結んだ集団といえます。

今、思い返して見ると、学生運動を開始した当初、この人は凄いと考えた私の人間判断の基準は、マルクス・レーニン主義関係の思想、理論内容にどれだけ熟知しているのかで

獄中寄稿

究極の絆、永遠の友情のもと

嗚呼!!
任俠ボルシエビキ

元赤軍派闘士が獄中で知ったホンモノの男と俠たち



田中義三

した。人によってはどの本のどこにどんな内容が書かれているのかを立て板に水の如く、正確にそらんじる活動家がいきましたが、思想、理論の大家として羨望の眼差しで仰ぎ見ていたこともありました。

その後、運動が先鋭化し、機動隊との対決が激烈になっていく中で、当然、私の人間判断基準が大きく変わりました。どれだけ体を張ってゲバルト（暴力闘争）をやれるかであり、武器や武装の問題をいかに真剣に考え、解決しようとしているのか

になりました。そんな一九六八年も暮のある日、ハイジャックの最高責任者であった今は亡き田宮高麿が「我々の仲間は機動隊に殺されているが、我々はまだ敵機動隊を殺っていないではないか」というような内容の演説をしたのを聞いて、度肝をぬかれたことがあります。しかし、こうした一連の左翼運動において、私がついていた革命家の基準、人間判断の基準がいかに甘く、ピントはずれなものだったのかは、その後の現実によって深く思い知らされ

ました。

大学に入学し、時間の経過と共に次第にいっぱい活動家として熟をあげていく中で、私は一度、招集された「学対会議」というのに代理で参加したことがあります。

私が属していた社会主義学生同盟という政治組織の指導部が学生対策として、各大学の組織責任者や中心的活動家を集めて闘争方針や活動方針などを討議、伝達する会議といえます。

その時に、北海道大学の学生で学対の指導部成員となっていたYという人を知りました。その会議で熱弁をふるった彼は、そのまま私の大学の過激サークルとして名を馳せていた「現代思想研究会」（かの有名な重信房子さんが事実上の責任者）の部屋に顔を出し、熱心に教えを垂れていたことがあります。痩せてはいましたが、精悍そのもので今もはっきりと記憶に残っています。

「今迄、哲学者は、色々と世界を解釈してきたのだが、大切なのは社会を変革することなのだ!!」とマルクスの有名な言葉をひきあい熱弁をふるいました。その一字一句が、私の真白な脳裏にしっかりと刻み込ま

れました。

それから三十余年、生徒であった私は、今のいままも、その教えを實踐していかんと努力していますが、その高説をたれ私を實踐活動にふるいたたせた張本人は、今どうなっているのでしょうか。

Yはわが国の最高学府の有名教授として、数々の本を出し、雑誌の座談会、テレビ出演で文字通り、世の中を解釈するのを仕事としており、金も相当かせいでいるようです。特にこの間は、アメリカにおける同時多発テロの発生により、中東問題の専門家として彼はひっぱりだこなっています。

この留置所でのある日のことです。昔、同じ赤軍として活動していた仲間が面会に来たので、「弁護士費用もまともに払えずにいるのだが、そのY氏に大口のカンパでも頼めないだろうか」と相談したことがあります。その仲間から返って来た言葉は、「田中さん、世の中のこと何もわかってないのですね。金のある人ほど一銭も出さないのですよ。」

今、私なんか会いに行っても見向きもしないですよ。金のない人達の方が、身を削ってでも出してくれるのですよ」ということでした。改めで、私の非常識を確認した次第です。ついでにもうひとつ述べます。

赤軍派が誕生し、大阪戦争、東京戦争、そして首相官邸占拠闘争等の勇ましい派手なスローガンをぶちあげたのですが、いずれも空手形に終りました。じり貧となっていく中で、起死回生の大バクチとして実行されたのが「よど号」ハイジャック闘争でした。

当時、赤軍派の中では、鉄砲玉のような存在だった私には、そうした方針を決定する重要な会議に参加できる資格はなかったのはいうまでもありません。ハイジャック闘争も日が迫り、いざ決行となるにつれ最高指揮者の田宮、そして小西等には、いささかの動揺もなかったのですが、その次のクラス、いうなれば中間幹部が何人か脱落して、戦線逃亡する中で補充されていったのが私だったとも言えます。当時、その赤軍

派の中でも最高幹部のひとりとして、断固たる武装闘争の主張者であった京都大学生のUという人がいました。いわば猛者中の猛者で、私も強く魅了され尊敬していた人です。幹部達の間では国外組、国内組に分れながら「外国で頑張ってくれ」「国内で頑張ってくれ」と互いに悲愴な決意が交わされたようです。私達にとっては、国内に残る人に、自らの運命の多くの部分をまかせたと同じことでした。

しかし、その最高幹部達は、私達を朝鮮に送り込んでおいて、梯子をはずしてしまふようなことを平気でやっています。もちろん中には、それ以降の情勢の変化を知り運動から身を引いて、良心の呵責でも感じているかのようにじつと暮らしている人もいますが、中には朝鮮に行ったことを今になってなんでもんな「テロ国家」「ならず者国家」に行つたのだといわんばかりにマスコミといっしょになって誹謗中傷している人までいるのです。

そのUなる人物も最高幹部のひとりとしてありながら何等責任をとることもなく、自分の姓を変え運動関係者と断絶し、掌を返したように、地方の名士として優雅な生活を謳歌しているようです。

また大学時代、大きな夢や豊富を抱き、力をふりしぼり、苦業をともにして闘った最も親しい仲間、同志であっても、我関せずと傍観し、私がタイにおいて厳しい裁判、獄中生活を強いられても、この東京拘留所の目と鼻の先についても面会はもとより手紙ひとつくれない人もいます。今、何がしかの重要な仕事や役職についているので、それに傷がつかないようにとのことなのでしょうが……まあこれも結局のところ、私という人間の不徳のいたす所だとは思いますが。そう思わないと私にも人間としての人並の感情がある以上、それを抑えることもできないし、こうして闘い続けることもできないのです……。

自身の実体験として、左翼運動にも裏切り者、背信者が生じている事実、血も涙もない連中が居るといふことを冷静に考えた時、左翼は思想、理念で結びついた根本的優位性があるといった私の信念に鉄槌が下

●田中義三——一九四九年青森県三沢市に生まれる。一九七〇年三月、日航機「よど号」をハイジャックして北鮮に。一九九六年三月、「ニセドル」事件でタイ当局に拘束されて裁判。その後日本に送還され、本年二月、ハイジャック事件等で懲役十二年の判決を受ける。現在、東京拘留所在監中。

された気になります。そうした先入観にとらわれず、左翼だろうと右翼だろうと、そして狭道界に身を置いていようと、客観的に具体的に人間研究をやっていく必要性をつくづく感じはじめました。

6

「獄同塾通信」がとどいたのは、そんな悶々とした気持ちで拘置所生活



タイで拘置中、拘置所から護送車で裁判所に到着した筆者／村上昭浩カメラマン撮影

を送っていた時であり、それは、私にとつて、この年にして、改めて、人間研究、人間に関する生きた知識を深め広めていく契機になりました。その「通信」を編集している大場知子という方をはじめ知ったのですが、多忙な中にあっても実に細やかな行き届いた配慮には本当に頭が下がります。彼女の最大の魅力はキリスト教徒であると自認しながらも

無条件的な自己愛に陥ることなく、キリスト教や教徒に対し、特に自分が具体的に接している教会や牧師に対しても常に冷静に、鋭く観察しており、自分の確固とした見解をもっていることです。人間というのは、自分や自分の属する集団に絶対的な愛情を注ぐのがある意味ではやむを得ず、当然とみなすのが一般的社会風潮なのですから……。情緒や本能を抑え、自分を自分達を鏡に映し出し客観視できるのは人間としての強みであり、凄味といえるのではないのでしょうか。

「獄同塾通信」には、丸岡修氏も投稿していますが彼も実に傑出した人物です。単に左翼運動という次元を越えて、「人民を反動的に支配している」権力との闘いである裁判、獄中闘争において、如何なる立場で臨むべきかのひとつの模範を実践しています。「仮釈なしの無期」終身刑を知り、敢えて獄死することも覚悟し、毅然たる姿勢を貫き通しています。

身をもって今の世の中なるものが、誰のため、どのような社会なのかを告発し、この社会の滅亡は不可避であることを明らかにし、たとえ

男が燃えるこの一冊!!

毎月14日発売

実証時代

BULL

定価390円

自身が再び自由になることがなくても、その志が報いられる時代が来ることを確信している生き方は、激しく人々の心をうちます。

このような文字通り信念と意志の固りのような人間に対しては敵としても、ただただ、最大の弾圧を加え、社会と完全に隔絶する監獄の中にぶち込んでおく以外の対策はないのです。彼の生き方を支える崇高な理念、不屈の闘志は、これからも多くの人々の胸の中で生き続け、語り伝えられていくことは疑う余地ありません。

また「獄同塾通信」八号に掲載された浴田由紀子さんの文章も実に感動的です。

それは「獄同塾のアイドル」岡本

夏生さんが賛美していることでも明らかです。

左翼といわれる人間が、一切の先入観を捨てて、俠道に生きる人間に対して、客観的にここまで暖かい眼差しで見つめ、その人の生いたち、生き様の具体的事実から人間的魅力を浮きあがらせていく内容には心が洗われます。長い獄中生活、いやそれ以上に真摯に生き、厳しき辛さを敢えて探し求め闘い抜ける人であつてこそ、限らない大きさと奥行きを持った懐をいだけるのであり、人間的思いやり、優しきの極致に至ることが可能なのだということを教えてください。

また彼女の文章の行間からは、人間にとって、ふたつとない「故郷」なるものが、如何に貴重で、愛すべきものとしてあるのかを知ることができます。

世の中には安泰な位置から肥え太り過ぎた余裕から何等かの偽善的事業を行ったり、有名人としての高み

から社会の雑魚がうごめく「水槽」をながめて評論しながら、更なる功名を求め、出来れば勲章のひとつでもという輩にあふれています。

浴田さんの生き方は、人間というのは、そうしたものを全て投げ捨て、弱者、無権利の人、最も辛く厳しい状況にある人と連携し、共に生きてこそ、人間としての価値があり、人間としての美しさを極めることが出来るのだということをしっかりと示してくれています。

こうして見てみると、人間にまず問われるべきことは右翼か左翼か俠道かという以前に、人間をどこまで愛し、信頼し、大切にすると人間の良心なるものを、どれだけ強く抱き続けることができるのかのように思います。

人間である以上、高い地位を得たい、人に認められたい、一目おかれる存在になりたい、出来れば金ももうけたい……と様々な要求、欲望があります。これは恐らく誰も否定し

ないでしょう。しかしこれらを全て投げ捨てても人間として何か守り抜くことが大切ですか。それは人間的良心です。それこそが人間のみが持つ、人間としての究極の価値ではないでしょうか。

人間らしく生きるとは何なのか、幸福とは何なのか真剣に問い続けて生きるだけでもそれなりに人間らし

い生き方が追求できるはずですよ。こうしたことを考えながら私は大場さんが送ってくれた「獄同塾」の川口和秀塾長の随想「我、木石にあらず」（編集部注・本誌一九九六年二月号）一九九八年四月号に掲載）を何度も読み返してみました。そこには垣間見られるのは果たして何なのかと……

〈次号につづく〉

鳴呼!!
任俠ボルシエビキ

獄中奇稿 究極の絆 永遠の友情のもと



獄同者が笑って読める投稿パンフ通信「獄同塾通信」は、現在、第10号まで発行されています。

〈連絡先〉

〒596-0067 大阪府岸和田市南田4-7 大場知子

〈郵便振替口座〉00900-5-159057「獄同塾通信」

〈ホームページアドレス〉

<http://www.h3.dion.ne.jp/~gokujuku/>

